
時の彼方 舞い散る雪

凜驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の彼方 舞い散る雪

【Zコード】

N1042A

【作者名】

凜驟
雨

【あらすじ】

あらすじは特にありません。気の済むよつて解釈をして頂き、感じていただければ幸いです。

プロローグ

これも、これも、それも……。

一面に広がる水溜り。

そこに浮かぶ奇妙な物体。

それを見て、また腹の中かがよじれるような、奇妙で苛立つ感覺がよみがえる。

また泣きだしそうだ。

頭の中が、カアッと熱くなる。

どうしてここにいるのだろう。

どうして私はここにいるのだろう。

何度も自分に問いかけてみるが、明確な答えなどできはしない。ならばと質問を端的にする。

私は誰？

私は私。

何故ここにいる？

ここが私の故郷だから。

何故この場所に立っている？

ここが私の家だから。

私は一人暮らし？

いいえ、私は父様と母様と三人暮らし。

私の家族は今どこに？

私の家族は床の上……。

また頭が熱くなる。

先程とは比べ物にならない程に。

たまらず床の上に膝をつくと、ぴちや、っと音がした。ゆっくりと視線を下ろす。

そこにはよく知っている顔が三つ。

一つは父様……。

一つは母様……。

最後の一つは……朱色に映る、私の顔だった。

プロローグA

視界が無かつた。

上下左右、どこに視線を彷徨わせよつとも、何も見えなかつた。そこが空間なのかということにさえ、疑問をもつほどに。そして低く鋭い唸り声が、風に乗つて耳元に届いた。

「お兄さん」

先程とは別の、呼びかける声が聞こえた。少年のような声だつた。「見える?」

その声は何も無い空間に響いた。

「だめ…………だな」

一番田の声が答える。

「俺の手が君の頭にのつてているという事実が、君から伝わつてなければ信じられない所だ」

問いかけに答えた声が言つて、手のひらからうなずく仕草を感じとつた。

「さて、どうしようか? 俺としてはここで野宿してもいいのだが、君はどうする?」

「お兄さん、そんなこと聞かれても、僕に選択権がないことぐらい知つてるよ。少しでもお兄さんから離れたら、さつき僕を囮んでた奴らに食べられちゃうからね」

少し残念そうな、不安そうな、曖昧な声で答えた。

「大丈夫、明日にはきっと視界が開けるぞ」

風の音が一瞬大きくなり、近くにある渓谷をつかつて旋律を奏でる。

少年の声がトーンを下げるで答える。

「明日もこの調子だつたら、二人とも飢え死にだよ」
くくく、つともう一人が笑う。そして、

「そのときは俺が君が、どっちか生き残るさ。数日くらいはな

「それは100%、お兄さんが生き残るよ。僕にとっては残念だけ
どね……」

深いため息をつぐが、それは空間に飲み込まれる。

「もう心配するな、冗談だよ」

一番田の声がそう答えると、その時ほんの少しだけ、歪みができる。風の吹いてくる方向に不規則性が生まれ、まわりの空間が、ほんの少しだけ見えてくる。

「どうやら野宿しないですみそうだな」

「…………ねえ。見えるようになつて、田の前にはただただ、何もない広い空間だけが広がつていたらどうしよう?」

少年の声が聞く。

「そうだな……、どうであれば俺的好奇心は満たされるかもしれないが、そんなことはありえないということを、俺は知つてゐるからな」

「つまんない」と聞いたね

「気にするな」

「ねえ、つまらない」と聞いたついでに、もう一つ聞いてもいいかな?」

「なんだ?」

少年の声には興味が含まれていた。

「お兄さんつていつたい何者なの?」

低く鋭い唸り声と、急に強まった風にまとわりつくようにして、今まで視界を遮っていたものが消えていく。一番田の声の主は一呼吸おいたあと、視界に入った少年の耳元まで顔を下げ、つぶやいた。

「それはトップシークレットだ」

思いは純真なままで

「お帰り、二ア」

森の奥、木漏れ日も射し込むかどつかといつような場所で、老婆が言つた。

老婆の田の前には薄い鮮やかな黒髪をもつた二アが立つていて、首から下げていたペンダントが風に揺れるごとに胸の中にしみこみ、右手にもつた薪の束を老婆に差し出した。

「二ア、もうすぐ日が暮れます。この辺は少しでも太陽が沈むと闇しかのこつません。季節もそろそろ秋になるし、明日からはもう少し早く帰つておいで」

二アは老婆の言葉に首をたてにふると、

「はい。 師匠」

と言葉短く切つた。

先程まではあつた木漏れ日も、太陽の傾きと共にすぐに消え静寂な闇が森を支配する。一人は家の中にある暖炉の前に向ひ合つよう並んで座ると、老婆のいれたホットミルクを飲みだした。

二アが静まり返つた部屋を濁すように、ポツリと喋る。

「……師匠。私は明日にでも出立しようかと思ひます」

「そうですか。あなたがここに来てから何年程経ちましたかねえ

」

「今日で、一 度10年になります」

抱えていたホットミルクへと老婆は田線を下げるごとに、コップを軽くもてあそぶように持ち直し、田線だけはホットミルクに向けたまま言つた。

「二ア。 復讐は、なにも生みませんよ？」

「 師匠、私は復讐などするつもりはありません。 ただ、私と同じような境遇の人間を増やしたくないだけです。 それに、一番最初に私が師匠についた言葉、あの時なら師匠はそれを止める」と

もできたはずです。でも、それをしなかつた。いや、しないどころか、私の言葉を聞き入れてくれた。その師匠がなぜ、いまさらになつてそんなことをおっしゃられるのか、理解しかねます」

老婆はゆつくりと目線をニアへと向ける。

「ここで一人静かに暮らしませんか？」

ニアはゆつくりと首を横に振る。

「そうですか……。ならば私は、あなたが間違つた所へたどりつかないことを祈りたいと思います」

「祈る必要などありません、師匠。私の力は守るべき者のために使ふと、この胸に誓つてますから」

そうニアは言つと、席を立ち上がり老婆へと背をむける。

「では、私は用意がありますのでこれで失礼します」

遠ざかっていくニアの背中を老婆は見送ると、深いため息をひとつ吐き、ゆりいすにもたれかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1042a/>

時の彼方 舞い散る雪

2010年10月20日03時42分発行